

第十八の天関＝高師卒業後の奉職

普通に考えれば、それほど大したことでもなさそうな、かような問題についても、無鉄砲である私は、学校当局へ提出した書類に、事もあるに「大阪以外なら何処であっても良い」という、無茶な希望地名を書いて提出したことである。それは思うに、広島への往復のつどに一度も大阪へ降りて見たことはないけれど、何となくその猥雑さにいやな感じを受けたことが理由であろう。されどかかる無茶なことを書いた以上、たとい北海道や沖縄へやられても、一言も文句や苦情は言えないわけである。

然るにいよいよ辞令をもらっち見ると、何と「大阪府へ出向を命ず」とあったのである。そしてそれは、担任教授だった金子健二先生が大した方で、新潟県下の名家の出であって、学者としても人間としても超特級の方であって、私を可愛がって下さり、後に私が建国大学に行くようになった前にも、当時旧制静岡高等学校長であった時に、私に来ないかのお言葉をいただいたが、私は「西先生に一度ご相談頂いた上で……」というような、非礼極まるお答えをしたのであった。されば生じいに私を呼んで説得などされずに、「大阪以外の地ならどこであっても」等と書いたその大阪府に行くこととなったのは、全く金子先生の御高配によるというべし。というのも、大阪府は当時尚志会（広島高師出身の同窓会）の中心地にて、私が大学卒業後、万人注目の的であった、天王寺師範及び女子師範の専攻科の哲学、倫理の担当講師と言うような栄職に就くを得たのは、全く以上の諸事情によるものと言ってよい。

されば、たとえ私の任地が北海道や沖縄でなくても、私の今日の学問は無かったのである。何となれば、私は前記のように、(1)新制の師範の専攻科にて、(2)衆人注目の哲学・倫理を、(3)しかも男女の両師範にて、(4)一人で担当することを得、(5)さら言えば、そこで、親しく教えを受けたる、我が国の生んだ大哲学者西晋一郎、西田幾多郎先生の処女作たる、「善の研究」と「倫理哲学講話」とを並行させて、満三年間教授できたことによって、哲学への私の生涯の基本的方向は、その間に育まれたのであった。

さらにまた、現在の「実践人」の前身とも言うべきものも、その間にすでにその生育を見た訳であって、その中心となってくれたのは故山本政雄君と端山護君のに二人であって、その内一人の端山君が現在も「実践人の家」の一中心であることは、無量の感慨である。尚次に述べる京大入学の際にも、直接事務当局に問いあわせて、いろいろと便益を得たのも、やはり大阪に奉職できたが故である。

以上のように考えて来ると、私の大阪赴任は、全く「神天」の命というべきである。